

国際社会学はおもしろい。そのおもしろさは、世界で起きていることをよく理解できるからだけではない。いまや世界が、私たち一人ひとりの日常生活とも深く関係し、その人の人生とも密接につながっているということ、このことを国際社会学は教えてくれるからでもある。

私たちは、世界が自分の生活や生き方とも大いに関係する時代を生きている。食糧、衣服、家具からインターネットを活用したコミュニケーションに至るまで、いまや世界と関わることなしに、私たちが生きることは難しい。自分の人生設計・生き方も、世界をつねに視野に入れて考えることが不可避となっている。かつて社会学者ウルリッヒ・ベックは、「個々人の人生はすでに世界社会に対して開かれて」おり、「個々人の人生の一部である」と述べていた（『危険社会——新しい近代への道』）。

しかし、国際社会学においてさえも、グローバル化する世界の様子を特定地域に偏らずに概観する本は、残念ながらこれまであまり存在しなかった。あるいは、存在したとしても、欧米先進国の視点からの論述、あるいは特定地域のエリア・スタディの形での論述が多かったように思われる。

また、国際社会学も社会学であるから——本書のなかですぐに論じられるが——、社会学独自の視点が存在する。それは企業活動中心の国際経済学や国家の覇権をめぐる国際政治学の視点ではない。社会学は、まさに日常生活を営む人々の行為に関心があり、人々の社会的行為のあり方を問う視点に特徴がある。そしていま、グローバル化する世界において社会学が着目するのが、人々が国境を越え

て移動し、交流し、ときには反目・対立しつつ、共存・共生する姿である。それは一言でいえば、「トランスナショナル」な事態である。日本を例にとれば、かつての経済目的の移民や現在の外国人労働者や難民といった現象だけではなく、留学、海外就業（駐在）、国際結婚、NGO 活動、さらには海外旅行もまた、身近にあるトランスナショナルな出来事である。

本書の最大の特徴は、人々の「トランスナショナル」な実践に焦点を当てている点にある。要するに、本書はグローバル化する現代世界を社会学の視点から読み解く入門書であり、特に、社会学のなかでも最近注目されている「国際社会学」という立ち位置から、「トランスナショナリズム」に焦点を合わせる点に特徴がある。

以上を踏まえていえば、本書のユニークさは次の3点にまとめられるだろう。①単なるエリア・スタディーズ（地域研究）ではない「グローバルな視点」（グローバル＝グローバル＋ローカル）を採用して世界の各地域を論じ、②その際は特に、日本やアジア、そして南半球（発展途上の地域が目立つ）の動向も重視して、欧米偏重にならないように努め、③そして何よりも、日常の人々の「トランスナショナルな移動・交流・共生」の諸相を描く点にある。こうした点から検討を始めて、最終的には、未来に向けた社会のあり方を読者とともに考えられるようにすること、それが最終的な狙いの一つである。

各執筆者には、日本との関係も視野に入れて、トランスナショナルに移動する人々の過去と現在に論及するようにお願いした。目次をみるとすぐわかるように、取り上げたのは、日中韓などの北東アジア、東南アジア・南アジアからイスラームの世界、そして北米とヨーロッパ、最後に南米とアフリカ、オセアニアといった、いわば「南」の世界である。編者としては、そこから学んだことをもとに、読者自身が未来の新たな社会形成をも展望できるようになることを

心から望んでいる。そのためにも、国際社会学やトランスナショナルイズムの解説を含む第Ⅰ部と、未来を展望する手がかりの一つとして、今後の可能性を論じる終章を設けた。

大学などで学ぶ学生だけでなく、一般の読者の方々も想定して、なるべくわかりやすく論じたつもりである。本書が、授業やゼミだけでなく、読書会や勉強会などでも活用されて、さまざまに議論のやり取りをする題材を提供できれば、望外の喜びである。

さあ、読者のみなさん、国際社会学の視点から、トランスナショナルな「世界一周旅行」に旅立ってみましょう。

最後になりましたが、有斐閣編集部の四竈佑介氏には、企画段階からたいへんお世話になりました。社会学系大学院出身の四竈氏は、いわば第3の編者といってもよいほどの活躍ぶりで、彼の適切な助言がなければ本書は成り立たなかったと思われます。ここに特にお名前を記して、深く感謝申し上げる次第です。

2016年2月

編者記す

■執筆者紹介

(執筆順, □ 内は担当箇所, ◇は編者。コラムについては目次末の一覧を参照)

◇樽本 英樹 (たるもと ひでき) [第1章・第10章]

北海道大学大学院文学研究科教授

主要業績 『国際移民と市民権ガバナンス——日英比較の国際社会学』 ミネルヴァ書房, 2012年。“Émergence et gestion des nouvelles tendances migratoires: le cas Japon,” *Migrations Société*, Vol. 27, no. 157. (Traduit de l'anglais par Catherine Wihtol de Wenden et Myrna Giovannella), 2015. 『よくわかる国際社会学〔第2版〕』 ミネルヴァ書房, 2016年。

◇西原 和久 (にしはら かずひさ) [第2章・第3章・終章]

成城大学社会イノベーション学部心理社会学科教授・名古屋大学名誉教授

主要業績 『意味の社会学——現象学的社会学の冒険』 弘文堂, 1998年。『間主観性の社会学理論——国家を超える社会の可能性 [1]』 新泉社, 2010年。『トランスナショナリズムと社会のイノベーション——越境する国際社会学とコスモポリタンの志向』 東信堂, 2016年。

首藤 明和 (しゅとう としかず) [第4章]

長崎大学多文化社会学部教授

主要業績 『中国の人治社会——もうひとつの文明として』 日本経済評論社, 2003年。『分岐する現代中国家族——個人と家族の再編成』 (共編著) 明石書店, 2008年。

郭 基煥 (かく きふあん)

[第5章]

東北学院大学経済学部教授

主要業績 『異郷被災——東北で暮らすコリアンにとっての3.11』
(共著) 荒蝦夷, 2015年。「災害ユートピアと外国人——あのと
きの『共生』を今、どう引き受けるか」『世界』第839号, 2013
年。

高谷 幸 (たかや さち)

[第6章]

岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授

主要業績 「近代家族の臨界としての日本型国際結婚」大澤真幸は
か編『講座現代7 身体と親密圏の変容』岩波書店, 2015年。
“Making Irregular Migrants Insecure in Japan,” Jiyoung Song
and Alistair D. B. Cook eds., *Irregular Migration and Human
Security in East Asia*, Routledge, 2014.

人見 泰弘 (ひとみ やすひろ)

[第7章]

名古屋学院大学国際文化学部専任講師

主要業績 「グローバリゼーション」櫻井義秀・飯田俊郎・西浦功
編『アンビシャス社会学』北海道大学出版会, 2014年。「在日ビ
ルマ系難民の移住過程——市民権・雇用・教育をめぐる諸問題」
吉原和男編『現代における人の国際移動——アジアの中の日本』
慶應義塾大学出版会, 2013年。

明石 純一 (あかし じゅんいち)

[第8章 (共著)]

筑波大学人文社会系准教授

主要業績 『入国管理政策——「1990年体制」の成立と展開』ナカ
ニシヤ出版, 2010年。『移住労働と世界的経済危機』(編著) 明
石書店, 2011年。

鹿毛 理恵（かげりえ）

〔第8章（共著）〕

佐賀女子短期大学特別研究員

主要業績 『国際労働移動の経済的便益と社会的費用——スリランカの出稼ぎ女性家事労働者の実態調査』日本評論社、2014年。
「海外就労奨励政策と経済発展の展開と課題」荒井悦代編『内戦後のスリランカ経済——持続的発展のための諸条件』アジア経済研究所、2016年。

岡井 宏文（おかい ひろふみ）

〔第9章〕

早稲田大学人間科学学術院助手

主要業績 「イスラーム・ネットワークの誕生——モスクの設立とイスラーム活動」『国境を越える——滞日ムスリム移民の社会学』（共著）青弓社、2007年。“Non-Muslim Japanese Residents' Attitudes toward Islam and Muslims: A Case Study of Fukuoka City”, Organization for Islamic Area Studies, Waseda University and Asia-Europe Institute, University of Malaya, eds., *Islam and Multiculturalism: Coexistence and Symbiosis*, JSPS Asia and Africa Science Platform Program, 2014.

新原 道信（にいはら みちのぶ）

〔第11章〕

中央大学文学部教授

主要業績 『“境界領域”のフィールドワーク——“惑星社会の諸問題”に応答するために』（編著）中央大学出版部、2014年。『うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』（編著）中央大学出版部、2016年。

江成 幸（えなり みゆき）

〔第12章〕

三重大学人文学部准教授

主要業績 「ブラジル人移住労働者の生活構造におけるジェンダー要因に関する考察」『人文論叢（三重大学人文学部文化学科研究紀要）』第33号，2016年。『ヨーロッパ・ロシア・アメリカのディアスポラ』（編著）明石書店，2009年。

アンジェロ・イシ（Angelo Ishi）

〔第13章〕

武蔵大学社会学部教授

主要業績 『ブラジルを知るための56章〔第2版〕』明石書店，2010年。「ジョアン・トシエイ・マスコ——『第二の故郷』で挑戦する日系ブラジル人」『ひとびとの精神史 第7巻 終焉する昭和』岩波書店，2016年。

塩原 良和（しおばら よしかず）

〔第14章〕

慶應義塾大学法学部教授

主要業績 『変革する多文化主義へ——オーストラリアからの展望』法政大学出版局，2010年。『共に生きる——多民族・多文化社会における対話』弘文堂，2012年。

宮脇 幸生（みやわき ゆきお）

〔第15章〕

大阪府立大学現代システム科学域教授

主要業績 『辺境の想像力——エチオピア国家支配に抗する少数民族ホール』世界思想社，2006年。『講座世界の先住民族 フェースト・ピープルズの現在 05——サハラ以南アフリカ』（共編著）明石書店，2008年。

Column 執筆者

山口博史（やまぐち ひろし） [Column ⑧]

都留文科大学 COC 推進機構准教授

芝 真里（しば まり） [Column ⑪]

日本学術振興会特別研究員（PD），成城大学社会イノベーション学部
非常勤講師

小坂有資（こさか ゆうすけ） [Column ⑱]

成城大学大学院博士課程，愛知みずほ大学ほか非常勤講師

後藤悠里（ごとう ゆり） [Column ⑲]

名古屋大学学生相談総合センター障害学生支援室学生相談員

第 I 部

国際社会学とトランスナショナリズム

第 1 章 国際社会学とは何か

2

● 現状と課題

1 グローバル化の日常化3

身近に迫るグローバル化 3 資源・情報の移動と社会学 4

2 なぜ「国際」社会学でなければならないのか5

伝統的 sociology の前提①：国民国家の中の社会 5 超国家
共同体と宗教共同体 6 伝統的 sociology の前提②：属性から
業績へ 7 エスニック・リバイバル 8 国際社会学
の基本的姿勢 9 人に関する国際社会学の主要な 3 テー
マ 10

3 国際社会学の新たな挑戦12

● トランスナショナリズム

トランスナショナリズムとは 12 国際社会学はトランス
ナショナリズムを分析できるのか 15

第 2 章 トランスナショナリズムとは何か

19

● もう一つの可能性を問う

1 トランスナショナリズムの意味20

トランスナショナルな社会関係 20 トランスナショナリ
ズムの語義 22 トランスナショナリズムの 3 つの焦点

- 2 方法論的トランスナショナリズム24
 方法論的ナショナリズム批判 24 方法論的トランスナ
 ショナリズムへ 25 国際社会学の新たな視角 26
- 3 トランスナショナリズムとその関連概念27
 ● グローカル化・多文化主義・間文化主義
- グローカル化 28 多文化主義の問題 28 間文化主義
 という視角 29 国際社会学とトランスナショナリズム論
 の可能性 31

第Ⅱ部

北東アジアの現在

第3章 日本における「越境者」

36

● トランスナショナルな移動の過去・現在・未来

「閉ざされた国」？ 37

1 日本における「越境者」の歴史的系譜38

● 1970年代までの動向

「日本」と「日本人」の原点？ 38 近世前後の「越境者」
 の系譜 39 近代日本の出移民の系譜 40 帝国日本の
 「越境者」問題 41 戦後の外国人政策と新しい「越境者」
 の系譜 44

2 現代日本の「越境者」たち45

● 1980年代以降の動向

新しい入移民 45 新しい出移民 46 留学生の問題
 47 外国人へのまなざしの変容 47

3 現代日本の「越境者」を考える48

● 多文化共生を超えて

21 世紀の日本と世界 48 多文化共生の定義と問題点 49

新しい「越境者」再考 50 多文化関係における媒介者と

ユートピア 52

第4章

中国にみるトランスナショナリズム

55

● グローバル行為の規準へ

1 漢民族の国際移動の歴史56

● 華僑・華人のトランスナショナル・ネットワーク

「越境」から「グローバル行為」へ 56 アジア海運の発

達と東南アジア華僑社会 57 近代の大量出国の時代へ

58 「帰国華僑」というトランスナショナリズム 60

2 少数民族の国際移動の歴史62

● 回族を例として

母語と故郷を失い、中国を故郷とすることで生成した民族

62 イスラーム教と儒学の「境界侵犯」：国際移動の高ま

りを支える「共生の作法」 65

3 「越境」にみる「グローバル行為の規準」68

「三非外国人」というまなざし：身体性や人権性の欠如 68

「グローバル行為の規準」を導くために 70

第5章

コリアン・ディアスポラとトランスナショナリズム 75

1 コリアン・ディアスポラの形成76

● 植民地期を中心に

700 万人のコリアン・ディアスポラ 76 「構造的暴力」を

背景にした移住 77 抵抗としての移住と政策による移住

79 強制的な移動 80

2	解放後のコリアン・ディアスポラと新しい移民	81
	日本に残ったコリアン・ディアスポラのその後	81 中国
	に残ったコリアン・ディアスポラのその後	82 アメリカ
	に向かったコリアン	84 アイデンティティへの問い
		86
3	ローカルなトランスナショナリズムの可能性	88
	ナショナリズムを超えて	88 コリアン・ディアスポラの
	語りから	90

第Ⅲ部

東南アジア・南アジアとイスラーム社会

第6章 フィリピンにおける国際移動 94

1	戦前・戦中の日比関係と人の移動	95
	戦前の移動：日本からフィリピンへ	95 戦中の在フィリ
	ピン日本人	96
2	戦後の日比関係と人の移動	97
	戦後日比関係の模索	97 カルチュラルダンサーからエン
	ターテイナーへ	97 「ジャバゆきさん」がもたらしたイ
	ンパクト	98 国際結婚の増加と減少
	99 階層化する	
	在日フィリピン人とトランスナショナルな実践の格差	100
3	フィリピンからみた移動	101
	フィリピン移民の歴史的背景	101 グローバル・ケア・
	チェーン	102 グローバル・ケア・チェーンのなかのフ
	ィリピン	103 トランスナショナリズムの複雑な様相
		106

第7章 ASEANのトランスナショナリズム 109

トランスナショナリズムの重層的な編成 110

1 ASEAN域内外の国際人口移動111

ASEANの成り立ちと構成国 111 地域統合と国際人口移動 112 国家レベルでの移住枠組み 115

2 トランスナショナリズムの影響116

経済的な影響①：海外送金 116 経済的な影響②：地域開発 117 政治的な影響①：母国の政治への関与 118 政治的な影響②：海外自国民をめぐる政治 119 社会文化的な影響①：社会的送金 119 社会文化的な影響②：越境者のアイデンティティ 120 社会文化的な影響③：国境を越える母親業 120

3 ASEANから日本へ・日本からASEANへ121

ASEANから日本へ 121 日本からASEANへ 123

第8章 南アジアと人の越境 128

● インドとスリランカを中心に

1 南アジアの多様性と国境を越える人の移動129

南アジアの多様性 129 南アジアにおける国境を越える人の移動 131

2 インドとインド人133

世界に散らばるインド人とインド系移民 133 インドと日本 134 現代インドから世界へ 135 インド政府の取り組み 136 母国・祖国への影響 136

3 スリランカ138

国際移住の歴史 138 スリランカ人の国際移住の現状と影響 139 日本のスリランカ人たち 141

- 1 イスラーム世界とグローバル化147
 - 普遍性と多様性 147 帰属意識 148 ムスリムとトランスナショナルな移動 149
- 2 異郷のイスラーム150
 - 日本のムスリム社会の形成 150 日本のムスリム社会の現在へ 151 日本モスクの成り立ち 152 地域の活動とトランスナショナルな社会空間 152 在日ムスリムの政治と経済 154
- 3 グローバル化のなかのムスリム社会155
 - イスラームとネットワーク 155 イスラーム経済と消費 157 ムスリム社会と他者 159

第Ⅳ部

ヨーロッパと北米
EU と NAFTA

- トランスナショナリズム研究の後発地 167
- 1 上からのトランスナショナリズム168
 - ヨーロッパ統合 168 EU 拡大の新たな波 169 トランスナショナルな空間の形成 170 国境を越える人々 171 上からのトランスナショナリズムの先進地域 172
- 2 下からのトランスナショナリズム172
 - 経済に関する移民トランスナショナリズム 172 政治に関する移民トランスナショナリズム 173 社会文化に関

する移民トランスナショナリズム 174

3 トランスナショナルな問題の噴出175

● イスラム教徒の問題を中心に

難民・非合法移民の問題 176 イスラム教徒の問題化
177 「暴動」とテロリズム 178 トランスナショナリズム
のヨーロッパ的特徴 180

第11章 南欧と大西洋の島々のトランスナショナリズム 185

1 南欧における人の移動と出会いの歴史186

人の移動と出会いの歴史から見たトランスナショナルな世界
186 「出／入移民」の枠を超える移動の複合性・重合性
188 「大航海時代ポルトガルの航海者たち」から見た現代
社会 189 「旅をして、出会い、ともに考える」という試
み 190

2 カーボベルデの社会的空間の再構成191

グローバル化と観光：カーボベルデの社会的空間 191
「再発見」されたカーボベルデ 193 カーボベルデの都
市・農村問題 194 さまよえるイタリア人？ 195 「選
択のジレンマ」 196 カーボベルデ人のグローバル化？
197 カーボベルデ人の「選択のジレンマ」 198

3 “移動民”が出会いつづける現代の地域社会198

移動するものの智慧 198 〈再帰的な旅〉としての「人の
移動」 199 多重／多層／多面な自己の「アイデンティゼ
ーション」 200 無数の「複合し重合する私」との協業
201 「移動民」と出会いつづける 201

第12章 北米地域のトランスナショナリズム 204

1 民族の多様性205

多民族社会の形成	205	北米に渡った日本人	206	現代のフローとストック	208
2 グローバル化時代の北米	210				
NAFTA とモノの自由化	210	人的資本による格差	211	移民政策と実態との溝	212
		移民政策の変容	213		
3 トランスナショナルな経験に向けて	214				
アジアからの渡米熱	214	越境者としての視点	216		

第Ⅴ部

南からの視線

南米・オセアニア・アフリカ

第13章 ブラジルから考える南米のトランスナショナリズム 222

● オリンピックとサッカーを事例に

南半球の番が来た 223 「多文化」を売りにした映像 223

1 サッカーでみる人の国際移動 225

一枚岩ではない南米 225 サッカー王国ブラジルとアルゼンチン人優遇政策 225 寛大な W 杯特別ビザ 228
オープンなメディアセンター 229 日系企業駐在員と日系移民 230

2 100 年を超えた日本発の移民 231

多民族国家の形成 231 世界最大の日系社会 231 「日系人を殺せ」という冗談 232 広がる活躍の場 233

3 在日ブラジル人と在外ブラジル人 234

デカセギの波 234 増える永住者 235 連携する在外ブラジル人 236

第14章 オセアニアから見えてくるもの 241

● トランスナショナルな想像力へのレッスン

「はやぶさ」の流れ落ちた土地から 242 メタファーで考
える 242

1 「放浪者」と収容施設243

モビリティ 243 庇護希望者政策の厳格化 243 「例
外」としての抑留施設 244 もうひとつの「例外」：欲待
される「旅行者」たち 245 在豪日本人住民の変遷 246

2 「留まり続けること」の主体性249

先住民族の苦難 249 土地とのつながりと自己決定 250
権利回復 250 グローバルな正義：国際人権規範の発展
251

3 他者の呼びかけに応える253

方法論から規範へ 253 アボリジニからの謝罪 253
リスクの共有から協働へ 255

第15章 アフリカにおけるトランスナショナリズム 259

● サハラ以南アフリカを中心に

1 サブサハラ・アフリカにおける人の移動の歴史260

大西洋奴隷交易と新大陸への移動 260 植民地期とポ
スト植民地期の移民の流れ 261 北アフリカ地域 262
西アフリカ地域 263 東アフリカ地域 265 南アフリ
カ地域 266 アフリカの移民の特徴 267

2 トランスナショナリズムの諸相268

頭脳流出 268 海外送金 269 人身売買 270

3 アフリカとアジア271

● 人の移動の現在

アジアのアフリカ人商人 271 アフリカにおける人の移動 272

終章

国際社会学の理論的課題

277

● コスモポリタンなトランスナショナリズムへ

グローバル時代のさらなる問い 278

1 近代国民国家の特性279

● 国際社会学の理論的問い (1)

近代国民国家の成立 279 近代国民国家への問い 280
ヴェーバー社会学からの示唆 281 ヴェーバー国家論の
視座 281

2 世界システムと国際分業282

● 国際社会学の理論的問い (2)

世界システム論 282 従属理論あるいは南北問題 283
国際分業の進展 284 新国際分業とポスト新国際分業
285

3 コスモポリタニズムへの問い286

● 国際社会学の課題

法政治的コスモポリタニズムとグローバル・ガバナンス
286 哲学倫理的コスモポリタニズムと正義論 288 社
会学的コスモポリタニズムの展開 289 大震災の被災地
から：媒介者という存在 291 コスモポリタンなトラン
スナショナリズムの地平 293

索引 299

Column 一覧

- | | | |
|---|-----------------------------|-----|
| ① | ポップカルチャーのトランスナショナリズム（樽本秀樹） | 13 |
| ② | 世界の格差への視点（西原和久） | 31 |
| ③ | オイジンとカナダ・バンクーバー（西原和久） | 43 |
| ④ | 台湾への視点（首藤明和） | 67 |
| ⑤ | 変化する韓国の移民事情（郭基煥） | 85 |
| ⑥ | 家事労働者（鹿毛理恵） | 104 |
| ⑦ | 和僑会（人見泰弘） | 124 |
| ⑧ | 中央アジアとウズベキスタン（山口博史） | 143 |
| ⑨ | シーア派とスンナ派（岡井宏文） | 156 |
| ⑩ | パリ新聞社襲撃事件とトランスナショナリズム（樽本英樹） | 179 |
| ⑪ | 北欧諸国の多文化主義（芝真理） | 181 |
| ⑫ | 地中海をわたる「難民」（新原道信） | 191 |
| ⑬ | モン移民を描いた映画（江成幸） | 212 |
| ⑭ | メルコスールで結ばれる南米諸国（アンジェロ・イシ） | 227 |
| ⑮ | オーストラリアと日本：移民と観光客（塩原良和） | 248 |
| ⑯ | ニュージーランドと先住民（西原和久） | 252 |
| ⑰ | エチオピアの移民（宮脇幸生） | 273 |
| ⑱ | ハンセン病問題の現在（小坂有資） | 287 |
| ⑲ | 障害者差別禁止法（後藤悠里） | 293 |

本文中で参照された文献は（著者姓 刊行年：引用元のページ）の形式で表記した。本文中の写真のうち出所表記のないものは、すべて各章の著者が撮影した。

第 I 部

国際社会学とトランスナショナリズム

Introduction

グローバル化がますます進展し、私たちの生活にきわめて大きな影響を与えるようになっていく。グローバル化による影響を分析し理解し、そしてグローバル化時代を生き抜いていくために、国際社会学はとても有望な学問的なツールである。それではどのような意味で有望なツールなのだろうか。さらに、近年の国境を越える人々の移動はトランスナショナリズムと呼ばれる社会現象や研究視角、未来展望を生み出している。はたしてトランスナショナリズムとはどのような社会現象なのだろうか。どのような研究視角、すなわちどのような社会現象の見方なのだろうか。どのような未来を描くことを可能にしてくれるのであろうか。第 I 部では国際社会学とトランスナショナリズムについて概説し、それら 2 つの可能性について論じることになろう。

I



アメリカ・ロサンゼルスのコリアタウン

現代は、さまざまなモノ、お金、人、情報・文化、感染症などが頻繁に国境を越える時代である。グローバル化は日常的なものとなり、社会を大きく変動させている。なかでも人の国境を越える（超える）移動とその影響の分析を、社会学は求められるようになった。ところが伝統的な社会学は、国民国家またはその一部のみを社会と想定し、年齢、性別、人種、家柄など個人の努力では変えられない属性ではなく、個人の努力や能力による業績で地位や資源が配分されるようになるかと仮定していた。そこで、国境を越える（超える）相互行為や制度、そして社会を分析し、属性のなかでも特に人種やエスニシティの働きを捉えるため国際社会学が誕生した。近年、移民の循環移動、国境を越える（超える）政治活動や社会貢献、経済活動や送金といったトランスナショナリズムをいかに捉えるかが国際社会学の課題となっている。

7 グローバル化の日常化

身近に迫るグローバル化

私たちはグローバル化の真ただ中で生きている。周りを見渡してみよう。

たくさんのモノが国境を越えてやってきている。急速に必需品になりつつあるスマートフォンは、いろいろな国でつくられたたくさんの部品が中国などで組み立てられ各国へと送られている。よく知られているように、日本でつくられた部品も重要な役割を担っている。みなさんが着ている衣服を見よう。メイド・イン・チャイナなどが多いのではないだろうか。少々前に問題になった冷凍の餃子や、日本のファーストフード店で使われていると話題になった鶏肉など食物も、国境を越えてやってくる。

お金も国境を越える。円高や円安が起こるのも、株価が上下するのも、海外投資家が日本円や日本企業の株を売り買いしていることによる影響が大きい。人も国境を越える。あなたの住んでいる街に外国人住民が住んでいるかもしれない。海外旅行へ行ったことのある人も多いことだろう。

文化や情報も国境を越える。お目当ての俳優を見るため、ハリウッド映画に足を運ぶ人も少なくない。世界中でたくさんのファンを獲得し一大ブームとなった韓流ドラマも国境を越えてきた文化である。洋楽やエスニック・ミュージックなど国境の向こうから来た音楽を好きな人もいるだろう。

他にも意外なものが国境を越えてくる。東京の公園の蚊から感染したデング熱や、アフリカ諸国から広がったエボラ出血熱は、病気も国境を越えることを物語っている。PM 2.5 など環境汚染も国境を越える。温暖化防止条約などの国際条約を結ぶ必要があるのは、

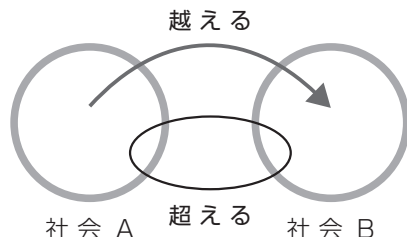


図 1-1 国境を「越える」と「超える」

各国で排出されたフロンなど温室効果ガスが、全地球に容易に広がってしまうからである。

資源・情報の移動と社会学

このようなモノ、お金、人、情報・文化などを総称して「資源・情報」と名付けておこう（吉田 1990）。さまざまな資源・情報が国境を越える／超えること、そしてさまざまな影響を引き起こすことをグローバル化と呼ぶことができる。私たちはグローバル化の時代を生きている。私たちはグローバル化から逃れることができない。

ここで、「国境を越える」と「国境を超える」の違いを考えておこう（図 1-1 参照）。具体的な現象において区別できない場合もあるけれども、概念的には区別すべきだからである。「国境を越える」は資源・情報の何かがある地点から別の地点へ国境を横切って移動することを多く指す。たとえば日系ブラジル人がブラジル・サンパウロ州の街から日本の東海地方の街へと移動するとき、「国境を越える」という表現を用いることができる。一方「国境を超える」は、資源・情報の「国境を越える」移動が恒常的になるなどして、国境をまたがった社会空間ができあがっている状態を指すことが多い。たとえば、日系ブラジル人の移動が頻繁になり、国をまたがって情報やお金がやりとりされ、そこにブローカーや雇用主が介在するなどして制度になっているとき、「国境を超える」という言い方をす

ることができる。本章では、両者が区別できない場合には「国境を越（超）える」と表現しておくことにしよう。

ここで誰しも疑問に思うことであろう。なぜ資源・情報は国境を越える／超えるのであろうか。その資源・情報の移動は具体的にどのような影響を与えているのであろうか。その影響が何らかの問題を引き起こしているとき、その問題をいかにして解決することができるのであろうか。

グローバル化に伴って浮上してきたこのような疑問に答えるため、新たな学問分野や手法が必要となってきた。特に、グローバル化が人々の活動、関係、制度に関連しているとき、社会学の視点や理論や方法が役に立つのではないかと有望視された。たしかに、社会学はまさに人々の諸行為とその帰結を自らの分析対象としてきた。この意味では、社会学に期待が集まるのはもっともなことであろう。しかし同時に、グローバル化に十分アプローチするために社会学を刷新することも必要となったのである。

なぜ社会学の刷新が必要なのだろうか。

2 なぜ「国際」社会学でなければならないのか

伝統的 sociology の前提①： 国民国家の中の社会

社会学を刷新し「国際社会学」を生み出さねばならなかった主な理由には2つある。第1の理由は「社会とは何か」という問いにかかわっている。

少なくとも1980年代半ばまでの社会学は、社会を「国民国家」または「国民国家の一部分」とであると暗黙に仮定し、疑うことはほとんどなかった。社会というと、日本やアメリカ合衆国や英国などを指すか、またはそれら各国内部の都市、農漁山村、集団や組織な

どのことだとしていたのである。ところが、すぐ上で見たように、資源・情報のグローバル化が進展した結果、社会が国境を越える／超えることは非常に容易になった。

たとえば、人の国際移動が非常に活発になり、移動先の国籍をもっていない人々が多く定住するなど、世界中のほとんどの社会は多文化になっていった。その社会は地理的な意味で国境によって囲まれてはいるものの、その内部は複数の文化で構成されている。すなわち「国境を超えている」のである。また、人の流れを中心として資源・情報がA国の特定地域とB国の特定地域の間で頻繁にやりとりされているとき、それら2つの地域間には国境を超えた人々のつながりや越境的コミュニティが形成されていると理解される。このような事態を伝統的な社会学は想定していなかった。

超国家共同体と宗教共同体

また、超国家共同体と呼ばれる社会制度も伝統的 sociology の分析射程に入っていなかった。ヨーロッパ連合（EU）、北米自由貿易協定（NAFTA）、東南アジア諸国連合（ASEAN）などは加盟国主導で形成されたという意味では国民国家の連合体と捉えたくなる。

しかし同時に、これら超国家共同体で生じている現象は必ずしも個々の国民国家に還元して理解し尽くせないものも含まれている。たとえば、地中海にランペドゥーサ島というイタリア領の小島がある。ここに北アフリカや中東から次から次へとやってくる移民たちは、単にこの島やイタリアを目指しているのではない。その多くはイタリアを入口にして英国やドイツなどEUに加盟する各国へ向かおうとしているのである。その背景には、EUがその内部で人の移動の自由化を進めており、この意味で国民国家を超えた政治体となっていることが挙げられる。このような国民国家を越（超）えた社会は伝統的 sociology の分析対象に入っていなかったものである。

さらにもう一つ、宗教共同体を例に出しておこう。宗教は国境を

超えたコミュニティをつくる強力な理念となりうる。特に近年におけるイスラム教の存在感の高まりは、国ごとの違いを超える勢いを示している。1991年に勃発した湾岸戦争時において、英国のイスラム教徒は戦争反対を訴え国境を越えて中東諸国のイスラム教徒を支援した。2014年からシリアとイラクの国境に建国を宣言した過激派組織「イスラム国 (IS)」は、まさにイスラム教を核として国境を超えて政治コミュニティをつくろうとする動きである。

以上のようなグローバル化の帰結は、社会という対象を考え直すよう社会学に反省を迫っている。国民国家とその一部分は、もはや唯一の社会ではないのである。

**伝統的社会学の前提②：
属性から業績へ**

社会学を刷新し国際社会学を確立することが求められるもう一つの理由は、伝統的社会学の理論的な前提がグローバル化時代において通用しなくなったことである。

1970年代までの社会学の理論的背景は2つに分かれており、ほとんどこれら2つしかなかったといえる。第1の理論的背景を近代派と呼んでおこう。その中心を占めたのがT.パーソンズ (Talcott Parsons) の研究を元にした構造機能主義 (Structural- functionalism) である (たとえば Parsons 1951=1974)。

近代派は次のように考えていた。工業化が起こり、さらにサービス経済化が起こるなど経済が近代化していけば、政治や家族など他の社会領域にも近代化が波及する。そして高度な機能分化が生じ社会は複雑化する。人々は流動化し村落共同体から都市へと流入する。人々への地位や資源の分配の基準は、その人々の出自などの「属性」ではなく、人々に何ができるかに関する「業績」となる。この過程で、社会は平等になっていくというのである。

伝統的社会学のもう一つの理論的背景は、マルクス派と呼べる。もちろん19世紀に活躍した哲学者・社会学者 K. マルクス (Karl

Marx)に端を発した社会理論であり、社会階級論をその中核のひとつとする(たとえばMarx 1962-63=1969-70)。

マルクス派は次のように考えた。社会が資本主義化していくと人々は資本家階級と労働者階級に分化していく。すなわち、貧富の差が広がり社会は二極分化していく。しかし、貧富の差が広がれば広がるほど労働者階級は不満を蓄積し、革命を起こして政権を奪取する。資本家階級という属性はもはや地位や資源を優先的に分配する基準とはなくなる。その結果、社会は平等化するというのである。

一見すると近代派とマルクス派はまったく異なることを主張していたかのように見える。しかし社会が高度化するとその結果人々の間に平等が達成されるという帰結の想定は同じであった。

さらに両者は共通の理論的な前提をもっていた。それは、社会が高度化(近代派の場合は近代化、マルクス派の場合は社会主義化)すると地位や資源は出自など人々の属性を基準としてではなく、能力に応じた業績を基準として分配されるようになるというものである。すなわち、「誰であるか」は意義を失い「何ができるか」が主要な基準になるというのが伝統的社会学の揺るぎのない共通理解であった。

エスニック・リバイバル

ところが、伝統的社会学は属性の意義喪失という理論的な前提に関しても反省を迫られることになる。1960年代後半から70年代半ばにかけて、高度に近代化したはずのいくつかの先進諸国で、人々の属性のひとつであるエスニシティを根拠とした分離独立運動や権利要求運動が噴出した。英国ではスコットランドやウェールズが、スペインではバスク地方が、カナダではケベック州が、自らの「固有の文化」を掲げてこれまで所属してきた国民国家に反旗を^{ひるがえ}翻したのである。

このような運動を、エスニック・リバイバル(ethnic revival)と呼ぶ。近代化によって消滅していくと考えられていたエスニシティ

という属性がよみがえったというわけである。ほぼ時期を同じくして、ジェンダーや年齢といった他の属性に関する不平等や格差も社会問題化していった。伝統的社会学の前提に反して、属性が突然復活したように見えた。

これ以後、社会学は属性の意義喪失を前提にはできず、属性の力を認め積極的に分析に取り入れることを迫られた。特に、移民集団やエスニック集団に着目せざるをえなくなった。21世紀になった現在でも、エスニック・リバイバルの問題は継続している。2014年に住民投票が行われた英国・スコットランドやスペイン・カタルーニャの独立問題は、伝統的社会学が刷新しなければならなかった理由をよく物語っているのである。

このように属性と業績に関する理論的な前提への反省が、社会学の刷新を必要とした第2の理由である。

国際社会学の基本的姿勢

それでは、国際社会学とはどのような学問領域なのだろうか。伝統的社会学とはどこが違うのであろうか。

他の学問領域でもよくあるように、国際社会学に確固とした境界があるわけではない。すなわち国際社会学といえるかどうかが微妙な学問的営為もたくさんある。しかし、私たちがそのような学問的営為を排除する必要はないだろう。むしろ、さまざまなものを内に取り込んで多様性を保ったほうが実りある研究が可能となるであろう。

一般に国際社会学はつぎの3つの学問領域の呼び名として使われてきた。第1に、「国際社会」をひとつの社会と見なして研究を行う「国際社会・学」である。第2に、国境を越（超）える現象に社会学の理論や方法でアプローチする「国際・社会学」である。第3に、これまで見過ごされがちだったアジア諸国やアフリカ諸国など第三世界や旧植民地の地域社会を対象にする「海外地域研究」であ

る（馬場 1993；梶田 2005：4，9-11）。このなかで本書は第2の意味での国際社会学を主眼におく。しかし第1，第3の意味での国際社会学を排除する意図はない。繰り返せば，学問領域の内部の多様性は研究をより生産的にすると信じるからである。

さらに，次の3つの基本方針を共有した社会学研究を国際社会学の中心であるとゆるやかに位置づけておくことにしよう。

- (1) 国境を越える／超える現象の中に社会（関係）を積極的に読み込む。
- (2) 人種やエスニシティを中心とした属性による社会的境界の形成と，不平等や階層格差の拡大・維持に着目する。
- (3) 社会学の視角・理論・方法を最大限駆使する。

人に関する国際社会学の
主要な3テーマ

以上のように国際社会学を把握しておくと，どのようなことが分析できることになるだろうか。国際社会学は多様なトピックを対象にしよう。

たとえば国境を越（超）える人々に関する主要なトピックには以下のようなものがある。

第1に，エスニシティの復活・持続である。もちろんこのトピックは1960年代終わりごろ顕著になったエスニック・リバイバル以来，関心を持たれ続けている。国際移民などのエスニック集団が受け入れ社会やその社会の文化に同化しないのはなぜか，エスニシティを共有していると理解している集団や地域が分離独立しようとするのはなぜか，エスニック集団をホスト社会に統合するにはどのようにしたらよいか，などの問いが探究されている（たとえば Alba and Nee 2005）。社会学理論とのつながりでいえば，社会運動論やコミュニティ論の問題意識や理論が適用されることになる。

第2に，エスニック階層の形成・持続・変容である。エスニック

事項

●アルファベット

ASEAN →東南アジア諸国連合
 ASEAN デバイド 112, 114
 BRICs (BRICS) 133, 234, 284
 CRBE →在外ブラジル人代表者評議会
 EC →ヨーロッパ共同体
 ECSC →欧州石炭鉄鋼共同体
 EEC →欧州経済共同体
 EPA (経済連携協定) 46
 EU →ヨーロッパ連合
 EURATOM →欧州原子力共同体
 EU 拡大 169
 ICT →情報通信技術
 ILO →国際労働機関
 IS →イスラム国
 ISIL →イスラム国
 IT 技術者 211
 NAFTA →北米自由貿易協定
 NGO 118, 280
 NGO/NPO 52
 NIES (新興工業経済地域) 282
 NRI (インド国外に暮らすインド人)
 134, 136
 ODA 269
 PIO (インドにルーツがあるインド系移
 民) 134, 136
 SAARC →南アジア地域協力連合
 128, 133
 SNS (ソーシャルネットワーキングサー
 ビス) 156

●あ行

アイデンティゼーション 200
 アイデンティティ 29, 50, 51, 62, 70,

86-88, 120, 129, 149, 158, 175, 178,
 179, 199-201, 217, 232, 278
 アイス 39, 42
 アウトステーション運動 250
 アジア系移民追放 265
 アジア通貨危機 69, 112
 アッラー 148
 アパルトヘイト 264, 266, 267
 アボリジニ 249-251, 253-255
 アボリジニ土地権法 250
 アミン政権 265
 アムステルダム条約 172
 アラブの春 156, 176
 アルカイダ 180
 アルジャジーラ 156
 アンダークラス 11
 慰安婦像 88
 慰安婦問題 88
 域内の自由移動 114
 移住の女性化 102
 移住労働者 135
 移植・入植 188
 イスラム (イスラーム) 55, 63-66,
 112, 129, 147-149, 153, 154, 156-158,
 259
 イスラム教 7, 143, 177, 180, 224
 イスラーム協力機構 (OIC) 149
 イスラーム金融 157-159
 イスラム国 (IS, ISIL) 7, 156, 157,
 160, 176, 177, 180
 イスラーム世界 150, 159, 160
 イスラーム復興 149
 意図せざる結果 11
 異文化 224
 移民 14, 40-44, 51, 58-60, 62, 69, 79,

- 84, 85, 95, 96, 101, 112, 114-122, 125, 135, 161, 172, 179, 199, 204-206, 208-210, 212-214, 216, 218, 226, 231, 232, 265, 273, 277, 285, 295
- 移民国家 167
- 移民システム 13, 213
- 移民集団 9
- 移民大国 224
- 移民に関するアドホックグループ 171
- 移民2世 211
- 移民ネットワーク 294
- 移民排斥 181
- 印 僑 134
- インターカルチュラル (間文化的) 291
- インターナショナル 21
- インディアン・ディアスポラに関するハイレベル委員会 136
- ヴァナキュラー・コスモポリタニズム 288
- 上からのグローバル化 15, 150
- 上からのトランスナショナリズム 111, 168, 170-172, 181
- ウェストファリア体制 279
- ウーメラ立ち入り制限区域 241-243, 245, 249-255
- ウンマ 148
- 永住許可 235, 268
- 永住権 47, 139, 171, 206, 208, 209
- 永住者 135, 142
- 永住者資格 208
- エクソダス 188
- エスニシティ 8, 10, 20, 154
- エスニック 61
- エスニック・エンクレーヴ 11
- エスニック階層 10
- エスニック企業家 11
- エスニック国家 167, 181
- エスニック・コミュニティ 29
- エスニック集団 9-11
- エスニック・ニッチ 151
- エスニック・ビジネス 208
- エスニック票 137
- エスニック・リバイバル 8-10
- 越 僑 120
- 越 境 56, 62, 68, 111, 131, 135, 142
- 越境者 35, 36, 38, 39, 42, 44, 45, 50, 51, 216
- のアイデンティティ 120
- 越境のコミュニティ 6, 216
- 遠隔地ナショナリズム 14
- エンターテイナー 97, 98
- オイル・ショック 263
- 欧州議会選挙権 171
- 欧州経済共同体 (EEC) 168
- 欧州原子力共同体 (EURATOM) 168
- 欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSC) 168
- 欧州対外国境管理協力庁 (FRONTEX) 177
- オガデン紛争 265
- 沖 縄 39, 42
- 沖縄人 (ウチナンチュ) 41
- お見合い結婚 177
- オリンピック 228, 238
- オールドカマー 82
- か 行
- 海外就労 117
- 海外就労政策 116
- 回 教 150
- 海 禁 58
- 外国人技能実習生 25
- 外国人集住都市会議 48
- 外国人登録法 44
- 外国人入国者数 37
- 改正国籍法 99
- 階層性 216
- 回 族 63, 67
- 外地人 43
- 外的国境 172
- 開発・発展 199
- 華僑・華人 56-62, 70, 124
- のアイデンティティ 61
- 格 差 9, 10, 31, 49, 131, 223, 224, 280,

- 286
 格差原理 289
 笠戸丸 41, 234
 家事労働者 102, 104, 119, 140
 下層階級 224
 家族の呼び寄せ 102
 カダフィ政権 263
 カテゴリ化 86
 ガバナンス 287
 ガバメント 287
 カファラ 273
 からゆきさん 95, 98
 カリフ 156
 環境難民 131
 観 光 37, 124, 191, 197, 215, 226
 看護師・介護福祉士候補者 46, 121
 環太平洋パートナーシップ (TPP) 協
 定 210
 関東大震災 78
 間文化主義 27, 29, 30
 間文化的 292
 官約移民 40
 管 理 272
 婦 化 180
 機会均等原理 289
 帰国華僑 60-62, 70, 71
 帰国子女 217
 帰国児童生徒 217
 記述概念 23
 季節的移動 263
 キッパー 178
 技能化 105
 技能実習生 45, 291
 技能実習制度 141
 機能分化 7
 規範概念 23
 9.11 同時多発テロ 209
 旧国際分業 284
 旧植民地 9
 境界侵犯 56, 62, 70, 71
 共 生 87
 強制移住 79
 強制収容所 43
 強制送還 214, 246
 強制連行 231
 業 績 7, 8
 共和主義 178
 極右勢力 180
 居住権 171
 近 代 279, 282, 288, 289
 近代化 7, 8, 76, 77, 95, 250, 284, 289
 近代国民国家 → 国民国家
 苦 力 59
 クリティカル・トランスナショナリズム
 218
 グリーンカード 208
 グリーンカード計画 268
 クレオール化 59, 188, 192, 199
 グローカル 27, 28, 30, 49, 66, 157, 292
 グローバリズム 288
 グローバル 36, 49, 68, 70, 157, 159,
 188, 201, 211, 253, 255, 278, 286-288,
 292
 グローバル化 3, 4, 7, 15, 25, 30, 56, 85,
 88, 129, 147, 155-157, 159, 182, 188,
 191, 197, 201, 206, 215, 217, 242, 243,
 271, 272, 277, 282, 284, 286
 グローバル・ガバナンス 286-288,
 293
 グローバル企業 285
 グローバル・ケア・チェーン 102,
 103
 グローバル・コスモポリタニズム
 288
 グローバル・サウス 283
 グローバル市場 106
 グローバル資本主義 285
 グローバルなガバナンス 290
 グローバルな競争 105, 112
 グローバルな正義 251, 289
 グローバル・ノース 283
 黒 船 40
 ケ ア 102, 103
 ケア労働のグローバル化 285
 ケア労働の連鎖 285
 経済移民 266

- 経済連携協定 (EPA) 121
- 継承言語 211
- ケイパビリティ 289
- ケヴィン・ラッド／ジュリア・ギラード
 - 労働党政権 245
- 血縁原理 44
- 研修生 45-46, 291
- 権 力 281
- 交易商人 271
- 高学歴移民 268
- 構造機能主義 7
- 構造的暴力 77, 78, 80
- 高度技術専門職 268
- 高度人材 139, 140, 246
- 高度専門職 267, 268
- 高度な技術をもつ移民 265, 268
- 公民権 250
- 公民権運動 84
- 故 郷 174
- 国際移動 20, 56, 94, 131, 285
- 国際移動の女性化 285
- 国際移民 →移民
- 国際 NGO 215, 287
- 国際経済学 21
- 国際結婚 25, 37, 40, 43, 47, 51, 99, 121, 204, 217, 246, 289, 292
- 国際社会学 5, 9, 10, 12, 15, 16, 20, 21, 31, 278, 279, 282, 286, 294
- 国際人権規範 12, 251, 252
- 国際政治学 20, 283
- 国際分業 59, 282, 284, 285
- 国際労働機関 (ILO) 251
- 国際労働力移動 284
- 国 籍 11, 52, 69
- 国籍法 44
- 国民国家 5, 6, 8, 14, 16, 20, 24, 49, 61, 148, 149, 278-280, 290
- 国民文化 29
- 国 連 279, 280, 287
- コスモポリタニズム 25, 26, 30, 49, 50, 253, 277, 278, 286, 288-294
- コスモポリタン 25, 51, 290, 292, 294
- 国 家 21, 49, 80, 88, 111, 238, 280-283
- 国境観光 14
- 国境管理 216, 271
- 国境を越える／超える 4, 5
- コペンハーゲン基準 168
- コミュニティ論 10
- コーラン 155
- コリョサラム (高麗人) 143
- コロomboプラン 141
- さ 行
- 在外インド人省 136
- 在外インド人の日 136, 137
- 在外ブラジル人 235, 238
- 在外ブラジル人代表者評議会 (CRBE) 236
- 災害ユートピア 52, 294
- 再生産労働 285
- 在日コリアン 82
- 在日ブラジル人 235, 236, 238
- 在留許可 237
- 在留資格 134
- 鎖 国 40
- 査 証 →ビザ
- サッカー 225-227, 230
- サハラ砂漠 260
- サブサハラ 260
- サブサハラ交易 271
- 差 別 43, 49, 280, 286-288
- 3.1 独立運動 79
- 三角交易 261
- 産業革命 261
- 3K (労働) 236
- 参政権 81
- サンフランシスコ講和条約 81
- 残留孤児 →中国帰国者
- シア派 156
- ジェノサイド 78, 265
- シェンゲン協定 171
- シェンゲン諸国 171
- ジェンダー 9, 71, 120
- 資源・情報 4
- のグローバル化 6

- 自国生まれのテロリスト 179
 - 下からのグローバル化 15, 150
 - 下からのトランスナショナリズム 110, 172, 175-177, 180, 182
- 児童労働 270
- 支配 281
- 自分探しの移民 51
- 資本主義 8, 59, 279, 284
- 市民権 11, 12, 61, 76, 85, 118, 288
- 市民権テスト 180
- 指紋押捺 44
- 社会運動論 10
- 社会階級論 8
- 社会主義 8
- 社会的行為 281, 282, 290
- 社会的送金 119
- 社会統合 11, 110
- 社会変動 250
- ジャバゆきさん 98
- ジャボネース・ガランチード 233
- 自由移動 115
- 十字架 178
- 従属理論 283-285
- 周 辺 283, 284
- 儒 教 77
- 出入国管理 227
- 出入国管理及び難民認定法 234
- 出入国管理政策 110, 228, 244, 245
- 出入国管理法 44, 45
- 循環移民 13
- 循環的な移民労働者 266
- 障害者差別禁止法 293
- 障害者の権利条約 293
- 少数民族 55, 62, 63
- 象徴的（存在論的）な移動 243
- 商品作物 260, 261
- 情報通信技術（ICT） 156, 157
- 植民地 59, 76, 77, 101, 205, 279, 285
- 植民地化 188, 199, 249, 250, 265
- 植民地支配 129, 138, 186, 261, 272
- 植民地主義 288
- 植民地政策 43
- 植民都市 194
- 女性移民 273
- 新1世 208
- 人 権 288
- 新興工業経済地域 → NIES
- 新国際分業 285
- 人際関係 21
- 人 種 10, 61, 71
- 新自由主義 288
- 人種・エスニシティ 216
- 人種差別 84, 216
- 人種差別禁止法 250
- 人種のるつぼ 204, 224
- 人種別割当制 84
- 真珠湾攻撃 43, 208
- 人身売買 98, 238, 270
- 人的資本 211
- 親密圏 82
- 人民解放戦線 139
- 頭脳獲得 139
- 頭脳還流 143
- 頭脳流出 139, 143, 211, 266, 268, 269
- スラム 224
- シンナ派 156
- 正 義 288, 289, 295
- 正義の二原理 289
- 政教分離（ライシテ） 178
- 生存戦略 269, 274
- 西洋近代 279
- 世界システム（論） 282, 284
- 世界大戦 279
- セカンド・ワーキングホリデー 247
- セックスワーカー 270
- ゼノフォビア 48
- 潜在能力 289
- 先住権原法 251
- 先住民族 250-252
- 先住民族の権利に関する国際連合宣言 251
- 戦争花嫁 204, 246
- 送 金 14, 15, 103, 116, 117, 131, 136, 137, 140, 142, 172, 214, 269
- 創氏改名 81
- 創発特性 71

ソウル・オリンピック 85

属 性 7-9

●た 行

第一次世界大戦 42

第1回世界におけるブラジル人会議
236

大航海時代 186, 190-192, 194, 205

第五福竜丸 255

滞在許可 273

第三世界 9, 285

ダーイッシュ → イスラム国

第二次世界大戦 11, 13, 135, 138, 232,
246, 279

太平洋戦争 80, 208, 212

大メコン圏 115

高い技術をもつ人材 267

ダーク・ツーリズム 287

多国籍アグリビジネス 213

多国籍企業 110, 111, 211, 284

他 者 68, 70, 89

タタール人 150, 151

タブリーギー・ジャマーアト 153

多文化共生 48-50, 52, 181

多文化社会 50, 112

多文化主義 27-30, 43, 49, 87, 181, 247

多文化主義から間文化主義へ 30

多文化・多民族共生 224

タミル・イーラム解放のトラ (LTTE)
139

多民族国家 204, 206, 231

多民族社会 205, 212

多様性 (ダイバーシティ) 112, 290

単一経済市場 170

単一民族神話 48

地域統合 111, 112

地方参政権 87

地方選挙権 171

中間者マイノリティ 11

中国帰国者 42

柱状社会 174

中 心 283, 284

中心-半周辺-周辺 282

超過滞在 237

超国家共同体 6

朝鮮戦争 212

朝鮮族 76, 83-85

賃金格差 268

ディアスポラ 75-84, 86, 87, 90, 91,
132-134, 136, 137, 139, 144

帝国主義 77, 279

定住民 190

低賃金労働者 272

デカセギ 235

出稼ぎ 40, 60, 101, 120, 131, 132, 139,
140, 151, 235, 248, 273

デカセギ現象 234

デニズンシップ 11, 167

テ ロ 129, 139, 180

テロリスト 177, 179, 180

テロリズム 157, 179, 243, 245

ドイモイ政策 120

同 化 61, 81, 86, 216

同化政策 250

東京オリンピック 48, 49

同時多発テロ 180, 208, 213

東南アジア諸国連合 (ASEAN) 6,
49, 109-118, 120, 121, 123-125

都市化 261

特 区 246

トランスナショナリズム 12-16, 20,
22, 23, 26, 27, 30-32, 52, 55, 56, 70, 71,
75, 76, 89, 90, 106, 109-111, 116, 124,
125, 150, 167, 170, 173-175, 180-182,
218, 253, 277-280, 286, 290, 293, 294

トランスナショナル 12, 14, 21, 35-38,
46, 48, 50-52, 56, 61, 66, 67, 71, 77, 87,
90, 96, 99, 100, 103, 106, 110, 115, 118,
144, 149, 152, 153, 167, 174-180, 201,
204-207, 214-217, 238, 252-254, 277,
278, 280, 282, 284-287, 290, 292

奴 隷 59, 64, 186, 261

奴隷交易 205, 260, 264

奴隷制 41, 231

トーレス海峡諸島民 249

トレビグループ 171

●な 行

内地雑居 40
 内的国境 172
 内発的な経済成長 269
 ナショナルリズム 22, 24, 30, 51, 75, 79, 87-89, 214
 ナショナリティ 294
 ナショナル 22, 292
 ナショナル・アイデンティティ 179
 ナショナル・ヒストリー 90
 南北格差 223, 224
 難民 110, 117, 118, 122, 123, 131, 177, 181, 186, 191, 205, 209, 243, 266, 272
 難民危機 176, 177
 難民認定 271
 難民認定数 36
 ニカブ 178
 二重国籍 213, 214
 日露戦争 150
 日韓大会（サッカー） 227
 日韓併合 42
 日系移民 208, 238
 日系移民百周年 234
 日系人 43, 45, 97, 204, 206, 208, 216, 230-235
 日系2世 208
 日系ブラジル人 4, 41, 45, 234
 日系ペルー人 45
 日清戦争 67
 日鮮同祖論 81
 日中国交回復 44
 日中戦争 79, 80
 日本人労働者 95
 日本ブラジル移住百周年 233, 235
 入管法 45
 入管法改定 235
 入国管理 173, 270
 ニューカマー 82, 85, 90
 盗まれた世代 249
 ネットワーク 57, 58, 66, 67, 71, 124, 125, 155-157

ノルウェー銃乱射事件 181

●は 行

媒介者 52, 291, 292
 排外主義 294
 ハイチ地震 52
 ハイブリディティ 86, 87
 バイリンガル教育 211
 バーガー 138, 139
 白豪主義 247, 248
 白豪主義政策 246
 パシフィック・ソリューション 244, 245
 発展途上 223
 ハーフ（ダブル、ミックス） 47, 98, 99
 バブル 247
 バブル経済 142, 271
 ハラール 150, 151, 155, 158-160
 バリ条約 168
 パリ新聞社襲撃事件 180
 ハワイ移民 40
 反アバルトヘイト闘争 266
 パンアメリカン保険機構（Opas） 238
 半周辺 283, 284
 阪神淡路大震災 82
 ハンセン病 287
 反捕鯨 248
 東日本大震災 49, 52, 82
 非合法移民 177
 庇護希望者 176, 243-245, 253
 庇護申請 244
 庇護申請者政策 244
 庇護センター 176
 ビザ 46, 47, 115, 136, 142, 151, 173, 180, 210, 215, 227-229, 246, 248, 272
 非熟練労働者 234, 265
 ヒスパニック 207
 非正規移民 115
 非正規雇用 100
 被選挙権 43
 人の移動 4, 6, 13, 14, 19, 28, 48, 77, 97,

- 115, 128, 129, 131, 142, 144, 170-172,
186, 188-190, 196, 200, 201, 227, 230,
238, 246, 260, 261, 267, 270-272, 294
—の自由化 131
- 避難民 131
- 批判的社会理論 31
- 非ムスリム 64, 159
- 平等化 8
- 貧困 31, 129, 198, 249, 270
- フィリピン 121
- 不公平 223
- プッシュ・プル (理論) 205, 213, 294
- 不平等 9, 10
- 普遍宗教 148
- 不法移民 210, 213, 214
- 不法就労 68, 116
- 不法滞在 68, 213
- 不法入国 68, 237
- ブラジル大会 228
- ブラズッカ 234
- プランテーション 134, 138, 205, 264,
266, 267, 272
- ブルカ 178
- ブルジョワジー 283
- フロール・コンテンプラシオン事件
103, 119
- 文化 50
- 文化移民 51
- 文化的な多元主義 61
- 文化の多様性 29
- 分離独立運動 8
- 米移民法改正 211
- 併合 77
- ヘイトスピーチ 48, 76, 87
- 北京オリンピック 69
- ベトナム戦争 212
- ベール 177, 178
- 辺境 186
- 偏見 287
- 暴動 179
- 方法論的コスモポリタニズム 25
- 方法論的トランスナショナリズム
23-25, 27, 243
- 方法論的ナショナリズム 24, 25, 290
- 亡命 110
- 亡命者 13
- 放浪者 243, 245, 246, 253
- 北米自由貿易協定 (NAFTA) 6, 111,
206, 210-213
- 母国政治 174
- ポストコロナリズム 288
- ポスト新国際分業 285, 286
- ポストナショナル・メンバーシップ
11, 167
- ボーダーランド 173
- ポップカルチャー 13
- ま 行
- マイノリティ 208, 217, 287, 289, 292,
294
- マオリ 252
- マキラドーラ 210
- マーストリヒト条約 171
- マック・ジョブ 285
- マボ判決 251
- マルチ・エスニック 204
- マルチカルチュラル (多文化的) 291
- 満州 42, 79
- 満州事変 79
- 密航 43
- 密航仲介業者 245
- 密入国 210
- 南アジア地域協力連合 (SAARC)
128, 133
- 民族国家化 82
- 民族差別 43
- ムーア (イスラム教徒) 139
- 矛盾した階級移動 102
- ムスリム 146-151, 154, 155, 157, 159,
160, 177, 179, 273
- ムスリム移民 178
- 無認可 210
- メルコスール 227, 228
- モスク 63, 66, 150-155, 159, 161, 172
- モビリティ 243, 245
- モン族 212

●や 行

- ユーゴスラビア紛争 169
- 輸出志向型工業化 285
- 輸入代替型工業化 284
- ヨーロッパ委員会 170
- ヨーロッパ議会 170
- ヨーロッパ共同体 (EC) 168
- ヨーロッパ人権裁判所 170
- ヨーロッパ統合 170, 181
- ヨーロッパ連合 (欧州連合, EU) 6,
20, 24, 25, 49, 111, 166, 168-171, 173,
176, 181, 227
- ヨーロッパ連合市民権 171

●ら 行

- ライシテ →政教分離
- ライフスタイル移住 51
- ランベドゥーサ島 6, 176
- リアル・ユートピア 27, 51, 52, 294
- リオデジャネイロ・オリンピック
223, 228
- リタイアメントビザ 247
- リドレス運動 43
- 留学生 47
- 旅行者 245, 246, 250, 253

- ルーツ 99
- ルンペン 283
- 例外状態 245
- 例外としての新自由主義 246
- 冷 戦 169
- 歴史修正主義 76, 89
- 連鎖移民 13
- 労働短期ビザ 228
- ローカライズ (ローカル化) 30, 217
- ローカル 49, 157, 158, 292
- ロサンゼルス暴動 86
- ローマ条約 168, 171

●わ 行

- ワイタング条約 252
- ワイルドゾーン 245
- 和 僑 124
- ワーキング・ホリデー (ワーホリ)
46, 47, 51, 248
- ワーキングホリデー制度 247
- ワーホリ →ワーキングホリデー
- ワールドカップ 226, 228, 229, 238
- ワールドカップ総合法 229
- 湾岸諸国 264, 274
- 湾岸戦争 7

人 名

●あ 行

- アイケルマン, D.F. 159
- アガンベン, G. 245
- 秋元才加 99
- アタリ, J. 197
- アボット, T. 245
- 網野善彦 40
- アーリ, J. 26
- アンダーソン, B. 14
- イーストウッド, C. 212
- ヴェーバー, M. 281, 282, 291
- ウォーラーステイン, I. 279, 282,

- 283
- オバマ, B. 214
- オング, A. 246

●か 行

- 加藤直樹 78
- ガンジー, M. 135, 136
- カント, I. 25, 286
- ゴーン, C. 231

●さ 行

- サッセン, S. 211
- サラッチャンドラ, E. 141

瀬川昌久 60
セン, A. 289
ソルニット, R. 52

●た 行

ダルマペーラ, A. 141
ディオゲネス 277, 286, 290, 295
鄭 和 57
デランティ, G. 290

●な 行

ナイル, A.M. 135
ナデラ, S. 135
ヌスバウム, M.A. 288, 289
ノーリア, N. 135

●は 行

バウマン, Z. 243, 245
バーソンズ, T. 7
馬 注 65, 66
バットウータ, I. 149
バーバ, H.K. 288
ハーバーマス, J. 286
バレーニャス, R.S. 102
潘宏立 60
ピスカトリ, J. 159
ファイスト, T. 12
フェリペ2世 194
フランク, A.G. 283

フリッシュ, M. 11
フリードマン, M. 60
ベック, U. 24-26, 157, 290
ベフ, H. 208
ヘルド, D. 285
ボース, R.B. 135
ポグゲ, T. 288
ボルテス, A. 12

●ま 行

前山隆 232
マルクス, K. 7
ムハンマド 147, 154, 156
メア, N. 29
メイレレス, F. 224
メルッチ, A. 196, 200, 202
メルレル, A. 189, 190, 191, 193, 200, 202
モーリス-スズキ, T. 242

●ら 行

ライト, E.O. 27
レオンシオ, B. 223, 224
ロバートソン, R. 28
ロールズ, J. 289

●わ 行

ワトソン, J. 60

国・地域

●あ 行

アジア (諸国) 9, 38, 102, 185, 188, 189, 204, 206, 214, 215, 271, 283
アフガニスタン 128-131
アフリカ (諸国) 3, 9, 38, 69, 147, 149, 176, 182, 185, 186, 188, 189, 205, 231, 259-261, 268, 270, 271, 272, 283
アメリカ 2, 5, 13, 14, 43, 47, 69, 76, 79, 84-87, 95, 97, 98, 101, 104, 118, 135, 137, 166, 167, 181, 186, 188, 204-206, 208-211, 213-215, 234, 261, 265, 266, 269, 284
アラブ 57, 63, 64, 112, 114, 138, 147, 148, 151, 156, 176, 206, 260, 263
アルジェリア 177, 263
アルゼンチン 41, 225-228
アンゴラ 190, 266
イギリス 5-9, 13, 59, 65, 129, 138, 157, 175-177, 179, 188, 195, 215, 252, 259,

260, 264
 イタリア 6, 103, 168, 173-176, 188-
 190, 195, 196, 259, 263
 イラク 7, 156
 イラン 151, 156
 インド 57, 63, 69, 128-136, 138, 143,
 147, 189, 190, 209, 215
 インドネシア 46, 104, 111-114, 116,
 117, 120, 121, 151, 271
 ウェールズ 8
 ウガンダ 265, 268
 ウズベキスタン 143
 ウルグアイ 225-227
 エクアドル 226, 227
 エジプト 69
 エストニア 169, 173
 エチオピア 265, 268, 273
 エリトリア 265, 266, 269
 エルサルバドル 14
 オーストラリア 28, 46, 59, 135, 223,
 241, 242, 244, 245-247, 249-255
 オーストリア 168
 オセアニア 158, 186
 オランダ 40, 58, 138, 171, 173, 175,
 178, 179, 188

●か 行

ガイアナ 226, 227
 カザフスタン 143
 カタルーニャ (スペイン) 9
 ガーナ 264, 267-270
 カナダ 28, 43, 46, 47, 115, 135, 167,
 181, 205, 206, 208, 210, 211
 カーボベルデ 185, 190-197, 199, 202
 カメルーン 260
 韓 国 25, 46, 69, 76, 77, 83-85, 88,
 112, 115, 209, 215, 285
 カンボジア 59, 111-117, 123, 124
 北アフリカ 6
 北朝鮮 84, 209
 ギニア 264
 キプロス 169
 キューバ 238

ギリシャ 176
 キルギス 143
 グレナダ 13
 クロアチア 169
 ケニア 204, 265, 266, 270
 ケベック (カナダ) 8
 コートジボワール 264, 267, 270
 コロンビア 14, 226, 227
 コンゴ 265

●さ 行

サウジアラビア 112, 151, 273
 ザンビア 266, 270
 シエラレオネ 264, 270
 ジブチ 266
 シリア 7, 181, 231
 シンガポール 59, 101, 103, 104, 111-
 114, 117, 119, 124, 134, 157, 271, 285
 ジンバブウェ 266, 268
 スウェーデン 168, 179, 181
 スコットランド 8, 9
 スーダン 263, 265, 266, 270
 スペイン 39, 57, 58, 95, 176, 178, 179,
 188-190, 193, 194, 225, 260, 263
 スリナム 226, 227
 スリランカ 104, 128-132, 134, 138-
 142
 スロバキア 169
 スロベニア 176
 スワジランド 266
 セーシェル 185
 セネガル 189, 264, 269, 272
 セルビア 176
 ソマリア 265, 266, 269

●た 行

タ イ 39, 59, 65, 111-115, 117, 118,
 121, 123, 124, 271
 台 湾 25, 112, 115, 285
 タジキスタン 143
 タンザニア 265
 チェコ 169
 チャド 263, 264, 270

中央アジア 63, 64, 143, 147, 149
 中 国 3, 25, 40, 55, 57, 60, 61, 63, 65,
 68, 77, 79, 83, 88, 131, 133, 147, 193,
 209, 215
 中東 (諸国) 6, 55, 102, 104, 112, 120,
 148, 156, 158, 176, 181
 チュニジア 156, 176, 178, 191, 263
 チ リ 226, 227
 デンマーク 179, 181, 223
 ドイツ 6, 168, 171, 174, 176, 190, 199,
 268
 東南アジア 14, 55, 57-60, 110, 111,
 124, 147, 149, 151, 156-158, 244
 トーゴ 270
 ドミニカ 14
 トルクメニスタン 143
 トルコ 151, 172, 174, 176, 178, 199

●な 行

ナイジェリア 69, 260, 264, 267-270
 ナミビア 193, 199, 266
 西アジア 63, 147, 156
 ニジェール 263, 264, 270
 西ヨーロッパ (諸国) 11, 167
 日 本 3, 5, 25, 37-39, 46, 69, 76, 78,
 81-88, 95, 99, 100, 106, 112, 118, 121,
 134, 135, 141, 142, 146, 147, 150-152,
 154, 159, 160, 206, 207, 215-217, 230,
 232, 234, 245-247, 254, 273
 ニュージーランド 46, 47, 135, 252
 ネパール 128, 130-132
 ノルウェー 181

●は 行

ハイチ 13, 52, 237
 パキスタン 128-132, 134, 151-153,
 172, 177, 199
 バスク (スペイン) 8
 パプアニューギニア 244
 パラグアイ 225-227
 ハワイ (アメリカ) 41, 101
 ハンガリー 169, 176
 バングラデシュ 128-130, 132, 134,

151, 174, 177
 東アジア 25, 57, 112
 東ティモール 111, 185, 190
 フィリピン 14, 39, 46, 59, 94-102, 104,
 106, 111, 113-117, 119, 131, 209
 フィンランド 168, 173, 181
 ブータン 128-130
 ブラジル 4, 27, 41, 52, 189-193, 195,
 215, 222-232, 234, 235, 237, 238, 261
 フランス 13, 65, 168, 171, 172, 176,
 178, 179, 180, 188, 190, 193, 194, 260,
 263, 264, 270
 ブルキナファソ 269, 270
 ブルネイ 113, 117
 ベトナム 39, 46, 59, 65, 111, 113-117,
 120, 124, 209
 ベネズエラ 226, 227
 ベルー 41, 226, 227
 ベルギー 168, 171, 178, 179
 北欧 (諸国) 181
 北東アジア 25, 26
 ボスニア・ヘルツェゴビナ 170
 ボツワナ 266, 267
 ポーランド 169, 173
 ボリビア 226, 227
 ポルトガル 138, 185, 188-190, 193,
 194, 196, 225, 260, 261
 香 港 101, 124, 285

●ま 行

マケドニア 176
 マダガスカル 134
 マラウイ 266, 270
 マ リ 264, 269, 270, 272
 マルタ 169
 マレーシア 111-115, 117, 134, 151,
 157, 271
 南アジア 128-132, 138, 142
 南アフリカ 265-267, 270
 ミャンマー (ビルマ) 65, 110-117
 メキシコ 13, 39, 95, 209-214
 モザンビーク 266, 270
 モーリシャス 134, 185

モーリタニア 264

モルディブ 128, 130

モロッコ 172, 174-176, 178, 263

●や 行

ヨルダン 115

ヨーロッパ 38, 58, 59, 143, 149, 154,
158, 159, 166, 167, 173, 176, 177, 179,
180, 181, 185, 186, 188-190, 192, 193,
199, 204, 205, 231, 259, 261, 265, 270

ヨーロッパ連合（欧州連合, EU） 6,
20, 24, 25, 49, 111, 168, 169, 171, 173,
176, 181, 227

●ら 行

ラオス 65, 111-115, 117

ラテンアメリカ（諸国） 14, 213, 283

ラトビア 169, 173

リトアニア 169, 173

リビア 263, 264, 266, 267

リヒテンシュタイン 143

リベリア 264, 270

ルクセンブルク 168, 171

ルワンダ 265

レソト 266, 269, 270

レバノン 231, 270

ロシア 69, 77, 79, 133, 169, 173, 193,
283

● 編者紹介

西原和久（にしはら かずひさ）

成城大学教授

樽本英樹（たるもと ひでき）

北海道大学教授



有斐閣コンパクト

現代人の国際社会学・入門

—— トランスナショナリズムという視点

Introduction to Global Sociology for Contemporaries:

New Perspectives of Transnationalism

2016 年 5 月 15 日 初版第 1 刷発行

編 者	西 原 和 久
	樽 本 英 樹
発 行 者	江 草 貞 治
発 行 所	株式会社 有 斐 閣

郵便番号101-0051
東京都千代田区神田神保町2-17
電話(03) 3264-1315〔編集〕
(03) 3265-6811〔営業〕
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・大日本法令印刷株式会社／製本・大口製本印刷株式会社

© 2016, K. Nishihara, H. Tarumoto. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-17421-4

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。